

# 帰脾湯・加味帰脾湯

担当：渡邊賀子

## 処方構成

人参、白朮、茯苓、生姜、大棗、甘草、木香、黄耆、竜眼肉、酸棗仁

+当帰

茯苓→茯苓、+当帰、遠志

茯苓→茯苓、+柴胡、山梔子

茯苓→茯苓、+牡丹皮、山梔子

茯苓→茯苓、+柴胡、牡丹皮、山梔子

帰脾湯 **济生方**

帰脾湯 (玉機微義)

帰脾湯 (薛氏医案)

加味帰脾湯 (薛氏医案)

加味帰脾湯 (薛氏医案)

加味帰脾湯 (薛氏医案)

## 原典

○济生方 卷之三・健忘論治／嚴用和  
「論じて曰く、それ健忘は常々喜んで忘る、是也。蓋し脾は意と思とを主る。心も亦思を主る。思慮過度にして意舎清からず、神官職せざれば、人をして健忘せしむ。是を治するの法は当に心脾を理し、神意をして寧からしむべし。静思するときは則ち之を得。帰脾湯、思慮制を過ぎ、心脾を勞傷し、健忘怔忡するを治す。」

○玉機微義 卷之十七・血証門／劉純  
「帰脾湯、思慮脾を傷り、心血を統攝すること能わず、これを以て妄行するを致し、或いは吐血、下血するを治す。」

○薛氏医案 内科摘要／薛己  
「帰脾湯、思慮脾を傷り、血を摂すること能わずして血妄りに行くことを致し、或いは健忘正中、驚悸盜汗し、或いは心脾痛みを作し、嗜臥して食少なく、大便調わず、或いは肢体重く痛み、月経調わず、赤白の帶下あり、或いは思慮脾を傷りて瘡癩を患うを治す。」  
「加味帰脾湯、即ち前方に柴胡、山梔を加う。」

○薛氏医案 薛注本・明医雜著／薛己  
「帰脾湯、思慮脾を傷り、血を摂すること能わずして血妄りに行くことを致し、或いは健忘怔忡、驚悸して盜汗し、或いは心脾痛みを作し、嗜臥して食少なく、或いは大便調わず、或いは肢体腫れ痛み、或いは思慮脾を傷りて瘡癩を患い、大凡は鬱結を懷抱して諸症を患い、或いは薬を用いるに宜しきを失するに因りて尅伐して胃を傷り、諸別の症と変ずる者を治するに最も宜しく用うべし。」  
「加味帰脾湯、即ち前方に牡丹皮、山梔を加え、脾經の血虚発熱等の症を治す。」

○薛氏医案 口齒類要／薛己  
「帰脾湯、一名济生帰脾湯、思慮脾を傷り、血耗りて唇皸み、氣鬱するに及びて瘡を生じ、咽喉利せず、発熱、血便、盜汗、疝熱等の症を治す。」  
「加味帰脾湯、即ち前方に柴胡、丹皮、山梔を加え、思慮脾火を動じて元氣損傷し、体倦れ、発熱し、飲食思わずして失血し、牙疼く等の症を治す。」

○濟世全書 卷之六・健忘／冀延賢

「帰脾湯 主方 思慮脾を傷り、血を損すること能わず、血妄りに行くことを致し、或いは吐し、或いは下し、或いは健忘正中、驚悸して寐らず、発熱盗汗し、或いは心脾傷りて痛み、嗜臥して食少なく、大便調わず、或いは血虚発熱し、或いは肢体重く痛み、婦人は月経調わず、赤白の帯下あり、或いは喘熱、内熱、或いは瘰癧流注して消散、潰斂すること能わず、或いは思慮脾を傷りて瘡痢と作するを治す。柴胡、梔子を加えて加味帰脾湯と名づく。」

方 意

人参  
白朮  
茯苓  
生姜  
大枣  
甘草  
= 四君子湯  
補氣

木香 = 理氣  
黄耆 補氣  
当归 補血  
竜眼肉  
酸棗仁 養心安神  
遠志

地黄の使子の場合に用いる。

柴胡  
山梔子 — 虚熱を去る

古 典

○衆方規矩／曲直瀬道三

「帰脾湯は思慮多くして脾を傷り、血を損することなく下血、吐血、衄血などの症を現し、心虚して怔忡、驚悸、健忘するなどの症を治す。」  
「虚熱には柴胡、牡丹皮、山梔子を加え、加味帰脾湯と名付ける。」

○医方口訣集／長沢道寿

「志が高くして慮り深き人、面色痿黄して腸風下血するものを治す」  
「諸疾で誤って薬害を被り、胃腸を損ない、六君子湯を用いて脾を醒ませ、補中益気湯を用いて陽を扶けても、なお応ぜぬものは、気血が納まらぬためである。この場合は必ず帰脾湯を用いる。」

○方意弁義／岡本一抱

「補中益気湯と帰脾湯の鑑別は、益気湯はひとえに気分を補い、この方は気分の虚だけでなく血分も佐けおぎなうのである。心脾の気血の不足とは、例えば灯火の油と火のようなもので、気は火に血は油に該当する。油がありながら火の光が鮮明でないときは、灯心を益して火を挑立てれば光は明るさを益す。このように気分が不足して火の光が明るくないような症は、補中益気湯の主治である。また、油も乾いて火の光が消えようとするとき、灯心を挑立てれば、油はいっそう乾いてしまう。このように血も気も不足し、油も乾き火の光も消えようとするような症は、帰脾湯の主治である。」

○牛山方考／香月牛山

1. この方は思慮過度、心脾を勞傷し、健忘正中を治する妙劑なり。
2. 心血虚乏の者、或いは志し高く、思慮深きひと、面色痿黄にして、腸風下血、咯血、衄血、遺精、白濁、小便淋瀝するの類に用いその効神の如し。
3. 婦人姑に得られず、男に寵せられず、思念遂げず、嫉妬愠怒する類の者は、脾心の二臟虚鬱して怔忡驚氣し、虚火上炎し、頭上代屑を生じ、手足麻痺し、臥を嗜み、食少、口渴し、陰門或いは痒く、或いは熱し、或いは臭蝕し、或いは腫痛し、或いは崩漏帯下の症となるもの。

のりあり、  
の方へ帰

※

4. 婦人一切陰門の病に用いて験を取るに神の如し、媾交の時血出すに、升麻、芍薬を加う。
5. 寡婦室女の類、夫を思いて得られざるもの、種々の鬱症を生ずるに、虚弱に属する者奇効あり。
6. 心脾血虚、陰火動し、発熱し、頭額に瘡を生じ、婦人は月事不調、男子は小便淋洩するに、加味帰脾湯殊に効あり。
7. 瘰癧馬刀一切の気腫、耳後項の辺りに累々として破れず、或いは未だ痛まず、其の腫未だ紅せず、柴胡、黄芩、川芎、連翹、貝母、昆布を加えて奇効あり。
8. 諸疾誤れる薬を蒙りて、脾胃を剋代する者には、六君子湯を用いて脾を補い、気を益すの剤を用いて陽を扶く、未だ応ぜざるものは脾血が収まらざるなり。この方を用いて奇効あり。

○方読弁解／福井楓亭

「この方症多し。第一、不食健忘の症に用いるときは、食を進め、胸をすかし、小便をして能く通ぜしむ。大凡補剤を用いるときは小便利少なきもの多し、この方も補剤にしてかつ小便利する薬味を伍せず、然れども、能く通利せしむること妙なり。また余薬は胸膈に泥むもの多し。この方はかえって胸を透かす、輔薬の柔らかなる方也。他の輔薬を用いて泥むことある時はこの方に代え用いるべし。十全大補湯、或いは補中益気湯の類は病人胸に滞ることを覚ゆ。この方は例えば氷砂糖を食するが如し、かえって能く胸を開く、方中の木香は気を降ろす為也。主治大便不調を伝えり、この方を用いるときは能く小便を利するを以て大便自ら止むの理なり。」

○療治経験筆記／津田玄仙

「人参養栄湯、十全大補湯、帰脾湯の類は、皆後人が仲景の黄耆建中湯に倣って組み立てた変方である。薬味は変わっても方意は大体同じであり、従って、使用目標もほぼ同様である。しかし、三方の使用の心得には、皆それぞれ少しづつの区別はある。すなわち、人参養栄湯は津液の枯竭を目標とし、十全大補湯は気血の虚寒を、また帰脾湯は心脾の血虚を目標にとる。これが三方の区別である。」

○勿誤薬室方函口訣／浅田宗伯

「この方は、明医雑著に拠って、遠志、当帰を加え用いて、健忘の外、思慮過度して心脾二臓を傷り、血を撰することならず、或いは吐血、衄血、或いは下血の症を治するなり。この方に柴胡、山梔子を加えたるは内科摘要の方なり。前症に虚熱を挟み、あるいは肝火を帯びる者に用いる。」

**帰脾湯**

=脾の働きが落ちて血を統制できなくなり、血が血脈から散出して、心血が不足した状態の時に、その血を脾経に戻すという意味。

主治：心脾両虚（脾の気虚と心血の虚）  
思慮憂思

○方象口訣／浅井貞庵

「血には四役があり、腎は血を生じ、血は水の一類である。心は血を主り、血の色は赤く、一身へめぐらせるのは、心の働きである。肝は血を蔵し、あたかも、入れ物に入れおく象で、太倉に米を積んでおくような意味合いのものである。また、脾は血を撰すといひ、これを取り締まり収め括って溢れないようにする。以上が四役である。ところが、血の収め括りがなく、締まりが悪いのは脾の過ちであり、脾経失血がそれである。吐血、下血、腫れ物から血が出るなどを皆出血という。さて、人の目が醒めるのは気の力、眠るのは血の主りであるが、血の力や陰の働きが乏しければ、少寐というよく眠れない状態になる。そのうえ、熱も出、盗汗も出て血の締まりが悪く、血の不足から健忘し、怔忡、驚悸などからとかく眠れないということになる。また、血の弱りから気も不足するため、時によっては、眠りたがることもある。これが婦人であれば、月水が調わず、日暮れから発熱することがある。瘰癧なども出来て膿をもち汚水が流れて疵が癒えないものもあり、皆血の締まりが悪いためである。脾臓の方へ血の締まりをよくし、その方へ帰すようにするということから、本方を帰脾と名付けたのである。」

# 使用目標

## ○漢方治療百話/矢数道明

～帰脾湯の運用について～

本因：脾虚と心血の虚  
末因：思慮憂思性

元来、虚弱弛緩制體質のもので、特に心身過労の結果、精神肉体ともに疲労困憊の極みに達し、その結果上下出血止むことなく、極度の貧血状態を現し、あるいは健忘症となり、怔忡、驚悸など神経の興奮状態を起し、不眠症、食欲全く不振で、あるいは大小便不調となり、婦人は経候不順などを来すのである。瘰癧流注の虚証に用いるのは、本方がよく脾を補い食欲を進め造血作用を促進し、内托の効を与えんがためである。

帰脾湯の熱状を帯びているものは加味帰脾湯  
虚因因子が足りない

## # 出血

山本徹

—低蛋白血で凝固しにくいための出血と、筋肉や血管の緊張収縮が悪いための出血。脾は肉を司るといって筋肉が弛緩して止まらない出血を「脾不統血」などと称し、低蛋白血で凝固されない出血を「気不摂血」とよんでいる。産後におきる弛緩性出血は気虚の出血の典型的なものである。

血管が脆い

<出血の特徴>

- 1 出血が久しく止まらない、或いは急激に多量の出血をする
- 2 出血の色は淡い
- 3 血も薄い
- 4 顔色が蒼白い
- 5 少し動くと、息切れがする、動悸が強くなる
- 6 元気がなく、疲れやすい、手足がだるく、すぐ眠くなる
- 7 脈は軟らかく力がない
- 8 舌は嫩かく舌色も淡い、口唇も血色がない

## # 貧血

—心血虚証モデルとしてWistar系雄性ラットに放血処理および鉄欠乏性飼料を施すことにより、RBC, Hb, Htともに正常の約50%の貧血ラットを作成した。四物湯および帰脾湯では、いずれも耳介色差の改善、血圧低下の改善、心肥大の抑制、胸腺重量低下の回復などがみられた。

しかし四物湯の方が良い

補益作用の研究 (第1報) ~貧血ラットによる心血虚証モデルの試作~

補益作用の研究 (第2報) ~貧血ラットに対する四物湯および帰脾湯の影響~

和漢医薬学雑誌11,225-235,1994

—遺伝性球状赤血球症の1乳児例に対し帰脾湯を投与し、貧血の改善が認められた。帰脾湯を投与した遺伝性球状赤血球症の1乳児例

和漢医薬学雑誌4,484,1987

## # 特発性血小板減少性紫斑病

—慢性ITPに対して加味帰脾湯は、血小板数増加では31.7%、臨床効果では40.9%の治療効果を示し、副作用は極めて少なかった。

特発性血小板減少性紫斑病(ITP)に対する

TJ-137ツムラ加味帰脾湯の多施設臨床評価 臨床と研究、70(11),3711-3718,1993

209例  
5-4-1  
14%  
51-31.7-1  
平均年齢10歳以上  
VDR 5歳以上13%  
5歳以下10.9%

—慢性ITP患者に対して、加味帰脾湯は免疫複合体を減少させることによりPAIgGやPBIgGを低下させ、抗血小板抗体による血小板減少を改善する。

Effects of Kami-kihi-to on platelet-binding immunoglobulin G in idiopathic (autoimmune) thrombocytopenic purpura

WAKAN-YAKU 10,40-46,1993

—小柴胡湯および加味帰脾湯は、直接的なメカニズムによって、網内系細胞のFcγレセプターの数を変化させる可能性は少なく、副腎皮質ステロイドとは、異なる機序でPBIgGを改善させる。

特発性血小板減少性紫斑病(ITP)に体する漢方製剤の作用メカニズム

~小柴胡湯および加味帰脾湯の網内系細胞に及ぼす影響~

和漢医薬学雑誌11,326-327,1994

免疫複合体減少  
岡石匠

一 加味帰脾湯投与後、血小板数の改善に伴ってPAIgGが有意に低下し、CD4/8ratioが有意に増加したことから、加味帰脾湯の治療効果は、免疫学的機序によるものと考えられた。加味帰脾湯有効群では、HLA class IのA2・Cw1抗原、あるいはclass IIのDPB1\*0901・DPB1\*0501の<sup>Allele</sup>アレルを持つものが多かった。

特発性血小板減少性紫斑病における加味帰脾湯有効症例の解析  
和漢医薬学雑誌12,310-311,1995

一 加味帰脾湯単独投与により血小板数の増加を認めず、副腎皮質ホルモン剤が有効であった症例で、副腎皮質ホルモン減量後の再発時に再投与したところ、血小板数の著しい増加が認められ、副腎皮質ホルモン剤の減量が可能になった。

加味帰脾湯投与により血小板数の増加を認め、  
副腎皮質ホルモン剤の減量が可能になった特発性血小板減少性紫斑病の1例  
日本東洋医学雑誌48(4),445-449,1998

### # 不眠

- 1) 気分が落ち着かず、物事に拘泥し、<sup>肝がた</sup>わずかなことも気にかかって眠れないものには、三黄瀉心湯、黄連解毒湯の類を用いる
- 2) 大病後または慢性病などで衰弱疲労して、身体枯燥の訴があるもの、或いは汗のあるもので不眠があれば、酸棗仁湯
- 3) 睡眠が浅く、夢ばかりみるもの、頭が重くて肩がこり、胃部膨満感のあるものには、甘草瀉心湯
- 4) 老人の不眠で物忘れの甚だしいものには帰脾湯の証がある
- 5) 不眠のものでも胸脇苦満があれば柴胡剤を用いる
- 6) 肺炎の回復期などで咳嗽、喀痰が多くて眠れないものに竹茹温胆湯の証がある
- 7) 一婦人、不眠を訴え、いかなる睡眠薬も効のないものに、手足煩熱を目標に三物黄芩湯を用いて奇効を得たことがある

一 自然老化ラットに、加味帰脾湯を投与したところ、活動期である暗期の行動量の増加と明期の行動量の減少を認め、サーカディアンリズムの制御機能低下が改善された。また、5HT、NAとAchの放出と代謝が亢進していた。

老化に伴うサーカディアンリズムの変化と神経化学的变化に対する  
加味帰脾湯の作用 和漢医薬学雑誌13,366-367,1996

一 不眠と精神不安を主訴として、各種睡眠薬や抗不安剤が長期間無効であった57才の女性で、加味帰脾湯を投与したところ、著効を示した。

頑固な不眠と精神不安を訴える高齢者に加味帰脾湯が有効であった一例  
和漢医薬学雑誌13,368-369,1996

### # 健忘、その他

一 この方のゆく健忘は、瘀血にもよらず、また柴胡剤、瀉心剤、石膏剤などの症でもない。老人が中風の下地をなすとき多く健忘となる。このところに、この方が効がある。老境の健忘にはよく効のある方である。たとえば、自分のそばにある火盆をここに持ってこいと人に命ぜんとし、その火盆の名を忘れ、或いは親戚、朋友の姓名を忘れなどすることは、老境に多くあるものである。壮年の人の健忘には桃核承気湯などのゆくこともあるが、老人には逐血剤のゆくことは少ない。しかしまた壮年にも帰脾湯のゆくところがある。帰脾湯のゆくところは、多くは面などつやつやし、或いは半身不随などもあるものである。しかし、このような症を帰脾湯の主症というのではない。この場は世人、多くは中風とみるものである。帰脾湯は老壯を論ぜず、健忘の症があっても、攻撃剤を与える殊の出来ない処に用いる。世医、帰脾湯の処へ、瀉心剤などを与え効がないと、難治などといって、捨てておく者がある。

一 CMIにてGrade III以上、Kupperman's Index 15点以上のものに、加味帰脾湯を投与したところ、78.9%で有効であった。また、CMIのGradeの高い心因性の関与の強いものほど有効率が高かった。エストロゲン併用の有無には無関係で、悪性疾患の再発例には有効率が低く、一日投与量では、7.5g/日の方が5.0g/日より有効率が高かった。

更年期不定愁訴症候群に対する加味帰脾湯の使用経験

和漢医薬学会誌7,494-495,1990

一卵巣摘出による更年期障害モデルラットに、加味帰脾湯を投与したところ、探索行動および痛覚閾値の変化と記憶障害を改善した。また、加味帰脾湯は子宮重量の回復を伴わず、脳内神経伝達系の賦活、あるいは何らかの作用によるストレス緩和によるものと推察された。

卵巣摘出による行動薬理学的変化に対する加味帰脾湯の作用

和漢医薬学雑誌12、370-371、1995

一加味帰脾湯のマウス免疫能に及ぼす影響

和漢医薬学雑誌8、514-515、1991

一帰脾湯に関する日中における臨床応用の比較考察

和漢医薬学雑誌8、492-493、1991

骨髄機能

VITD

加味帰脾湯

QOLの改善

虚証=薬方の探の実際

帰脾湯はまことによく効く方であるけれども、ちょっと証を間違えて実証のものなどに用いると、ひどくわるくなることがある。椿庭夜話に、この方を与えて、発狂して自殺した例が出ている。

『今俗に云ふ癩証で、しきりに物事を苦にして種々の容体を言うて、自ら大病となし、或いは自刃せんとし、或いは悲傷する者がある。しかし時によっては、起居、飲食とも変りなく、診察してみると、多くは脈が沈細で、人參や附子を用いたいようである。しかしこのような証はひどい虚証のようにみえても、うっかり人參や附子の入った方剤はやれないものである。先ず疏肝剤（柴胡剤などを指している）がよい。

一婦人があり、肝\*証だといって、治を請うた。そしていうのに、私の病気は肝証だけれども、帰脾湯を用いなくてくださいと。そこで余がそのわけを詰問すると、婦人がいうのに、先年、私の夫が肝証にかかって、ある医者に治を乞うたところ、その医者が虚証と診断して帰脾湯を与えた。するとたちまち上逆、発狂して自殺してしまつたと。余はこれを信ずることができず、疑問に思っていた。ところが、その後、また1人の婦人が肝証で治を乞うたが、虚証のようにみえるので帰脾湯を用いたところ、たちまち発狂して、井戸に入って死んだ。そこではじめて、前の婦人の云ったことが、こじつけでないことを知り感服した。その後、また1人の男子の肝証を診察し、よほどの虚証であったから、帰脾湯を用いたところ、1年ばかりで全治した。

帰脾湯は、証に適中すれば、その効は神の如くすばらしいが、一度誤まるときは、人を殺すこともすみやかである。よくよくつつしみ、虚実を弁別して用いなければならぬ。』

巨々漢陰の梧竹樓方函口訣

『一男子、20歳あまり、平素から虚弱なたちであったが、12月になって、ある朝、早く起きて商売の帳じりを合せたところ、取引を間違えて余ほど損になっていることがわかり、ひどく心配した。すると急に顔色がおわるくなり、胸の気持もわるくなって、その夜血を沢山吐いた。それから、物事におどろきやすくなり、動悸がしたり、ねむれなかつたりするようになった。そこで帰脾湯に梔子と柴胡を加えた加味帰脾湯を与えたところすっかりよくなった。』

昭和30年6月20日初診の6歳の男子。母親の語るところによると、この子は生れて間もなくから貧血があり、その貧血の原因が不明であった。約2年前までは時々痙攣を起してひきつけたが、最近発作がなくなった。よくかぜをひく；下痢はしない。

貧血はかなりひどく、枯れかかった竹の葉のような色をしている。脈は微細である。腹診すると、脾臓は臍の下方にまで肥大し、肝臓は季肋弓より2横指ほど下にまで肥大している。このような症状から考えると白血病のように見える。しかしそれにしては、経過が長すぎるように思われる。患家は生計が苦しいので、ここ2、3年は医療をうけていないという。したがって精密な検査をうけたこともないという。

私はこれに帰脾湯を10日分を与えた。ところが、それきり来院しないので、どうなったかと心配していたところ、2ヵ月ほどたってまた来院した。みると、貧血が減じ、血色もよくなり、脾臓は縮小して、初診時の半分ぐらいとなり、肝臓もふれなくなっていた。私はおどろいた。この調子なら治るかも知れないから、もっとつづけてのむようにと、また10日分を与えたが、患者はそれきり来院しない。

次の患者はある病院で悪性貧血と診断せられ、予後がよくないという見透しだから、どんな治療でもしてみるがいいとの宣告を下され、私に往診をたのんできたのであった。

昭和16年の梅雨空のうっとおしい日であった。東京のある病院に私はその患者を見舞った。患者は28歳の婦人で、1男1女があり、数ヵ月前からこの病院に入院していたが、病勢は次第に悪化し、あと1ヵ月の命があぶないと云われたという。

病室に入った私は吸呑みで口をしめらしている血色のわるい婦人を見た。口渇はあるが、水をのんでも、すぐ吐くので、1口ずつ口にふくんで吐き出し、ただ口をしめらすだけでこらえているという。舌には乳頭がなくなって赤くただれている。脈をみると沈小弱で、体温は38度7分。腹部は陥没していて、臍部では動悸が亢進し、下半身には浮腫がある。

以上の病状から薬方を考えると、四逆加人參湯、附子理中湯なども頭に浮んだが、貧血がひどいので、帰脾湯とし、これに柴胡と梔子を加えた。すなわち加味帰脾湯である。これをのむと頑固な嘔吐がやみ、その夜は尿がめずらしくたくさん出た。4、5日たつと体温も37度ぐらいに下り、食欲も出てきた。7日後に、患者は自宅に帰って、私の薬だけで治療することを決心したので、その日の夕方、私は患家に往診した。この日は、もう下肢に浮腫もなく、顔に生気があふれていた。こんな状態で貧血の方もぐんぐんよくなり、5ヵ月ほど服薬をつづけて休薬した。この患者のおじさんに有名な学者がいてこの患者の貧血が治ったというので、私に何人かの貧血患者を紹介して下さった。それから20年になるが、この患者はこれといって重い病気もせずに元気であるという。

昭和33年の7月に某大学で再生不良性貧血と診断せられた少年を診に行つた。その患者はその前年よりからだをだるがっていた。はじめ医師は肝臓がわるいということで、その手当をうけていたが、よならず、だんだん貧血が現われてきたので、某大学病院に入院した。そこでは、再生不良性貧血と診断せられ、輸血を唯一の治療としていたが、治療を担当している医師が、漢方薬をのんでみたらどうだろうと云うことで、私に往診を依頼してきたのであった。

診察したところ、輸血のためか血色はわるくない。元気もある。どこをみてもつかまえても場所がない。そこでこれにも加味帰脾湯を与えてみた。ところで大学の血液検査の結果はだんだんよいということで、8月から輸血をやめてしまった。これまでは輸血を休むとすぐ悪くなるのに、こんどはちっとも悪化して来ないから、薬が効いているだろうということであった。これですつとこの方のみをつづけたところ、昭和34年の元旦にとどいた先生からの業書には、次のように書いてあった。“ちょうど診察していただきました頃から、輸血の間隔が次第にのび、現在は8月以後、まったく輸血をせずに赤血球350万、白血球4000万、血漿液2万を保持しております”

この患者はその後次第によくなり、休薬してから2年あまりになるが、まったく健康で通学している。

中〇花〇という五六歳の婦人、初診は昭和46年7月であった。一見して体格や栄養は普通である。顔色はあまりよくない。主訴をきくと十年前にメニール病といわれたことがある。四年前に腎盂炎を起し四〇度の高熱が続いた。抗生物質などを飲んで熱は下つたが、全身に肝斑が出るようになった。プレドニンを服用したとき、ひどくムーンフェイスとなつたので中止した。その後不眠症となつてコントールを服用したが、その頃から紫斑が多発するようになった。そして検査の結果、血小板が減少し、最もひどいときは一万位になつたこともあるが、現在は七万位といわれた。子供は三人ある。食欲や便通は普通である。血圧は低く一〇〇/七〇しかない。K大病院では血小板減少性紫斑病といわれた。

初め柴芍六君子湯を与えたが、服薬後疲労感が増したというので帰脾湯に転方し、牛黄丸を一日七粒宛兼用した。この方にしてから睡眠がよくなり、倦怠感もなくなり、新しい肝斑が出なくなり、紫斑の出るのが以前より少なくなり、ときには一つもないこともあつた。以来六ヶ月服用したが、途中不眠症を訴えたとき帰脾湯に温胆湯を合方にして与えた。いままでも虫にさされたところや、打つたところが、紫色になるのであつたが、雪の日に転んで臀を打つたがシミは出なかつたので嬉しかつたという。帰脾湯に温胆湯を合方にして二ヶ月ほどすぎると、すこし眠りが過ぎ、嗜眠状態となつたので、帰脾湯に戻し、松寿仙(松葉の葉緑素液)を兼用させるようにしたが、一般の状態が好転している。この患者は一般状態がよいので、その後病院に行かないから血液検査の結果が判らない。

山田光胤は、抑うつ気分、不安、不眠等のある患者に帰脾湯加香附子、黄連を用いて、著効を得た例を報告している。

『〇村〇〇助 62歳 男子 妻と子供2人のある銀行員 初診 34.6.6. 主なる愁訴 抑うつ気分、不安、不眠等。』

現病歴 約3月前(3月12日)10歳になる末の息子を急病で亡くした。その直後は気付かなかつたが、日が経つにつれ、“かわいそうなことをしてしまった”と始終考えているようになった。1ヵ月後には食欲は全くなく、瘦せが目立ち、気分は常に悲しく憂うつで、何事も手につかなくなり、ぼんやりして考えがまとまらず、仕事も出来ないので勤めを休むようになった。夜はまったく眠れなかつた。最近は大分気持が落ちついたので勤めに出るようになったが、身体や足がだるく、疲れ易く、時々心臓が止まりそうな感じが起り、不安になる。希望や物事に対する興味が少しも湧かない。酒を飲んだ時だけは元気になるが、その後では反って具合が悪くなるという訴えであつた。

性格 温和、小心、丁寧、正直、几帳面で、以前は身体的には自信があり、病気をしたこともないと云う。

現症 発病当初、抑うつ状態が中心であつたのに対し、初診時の状態は、心氣的訴えと、不安が著明であり、集中困難、興感喪失、無感心、不眠などを伴っていた。

身体的には、顔色やや蒼白で潤いがなく、さえない。身長は大で、肉付きは中等、筋肉も適度に緊張している。脈は沈細でやや遅、腹部は肉付きもよく、弾力もあつて、腹証には特徴がない。腰部の志室に圧痛が著明である。身体症状としては、盗汗の他に特記すべきことはない。

治療および経過 身体的に証を決めることが出来ないので、思慮多くして脾を傷つた例と考え、帰脾湯加香附子、黄連を投与した。黄連は、不安、不眠等に対して鎮静させる目的であつた。

1週後：気分爽快になり、食欲が出て、次第に眠れるようになった。その間、一度不安発作をみた。

2週後：気分はすっかり安定し、食欲もすすみ、体重も回復したと言つて、すっかり元気になった。

1ヵ月後：上腕痛と、時に気分が沈む日があると言ふ。しかし3週以後は休業していた。

2ヵ月後：時に発汗が多い。酒を飲むと下痢し易くなつたと云う。

其後、1ヵ月に1度ぐらい胃腸障害を訴えて来院し、4、5日分の薬を投薬する程度で初診時のような精神症状はまったくみられない。』

特発性血小板減少性紫斑病(25歳女性)

花輪所長

私の経験では、25歳の女性の特発性血小板減少性紫斑病の症例があります。すでに他の病院でsplenectomyの手術を受けておりましたが、脾臓のない状態で、一時的には血小板が戻つてよかつたのですが、また減少してしまつて、あとはステロイドと免疫抑制剤でなんとか治療しておりました。血小板が1万を切ることもまれではなく、しかもステロイドの副作用が非常にひどく出ているという状態で私の外来へ来ました。この方に私は帰脾湯に柴胡と山梔子を入つた、加味帰脾湯という処方を出しました。そうしますと、ステロイドを30mgぐらい使つていたものが、5mgぐらいまでに減量できて、免疫抑制剤も中止することができ、血小板も7万からよい時は10万ぐらいで非常に安定してきました。しかもステロイドによるムーンフェイスとかアクネなどがとれまして、非常に喜ばれた症例を持っております。これはまだ途中経過ですので、これからステロイドが完全に切れるかどうか分かりませんが、よい1例だと思つております。

加味帰脾湯にしましたのは、ステロイドを服用したために起こる顔のほてりとか、胸苦しさ、イライラなどの症状が、ステロイドを飲んでから出たということのためです。帰脾湯に山梔子、柴胡を加える証は、帰脾湯の証があつて、しかもステロイドを使うと生じるような肝火のある状態というふうな形でとらえることができそうです。

70本 伝率中患者 肝硬変のPC

矢数道明氏の、漢方百話には、次のような治験例がある。『和〇〇夫人 54歳』

本患者を私はすでに2年来治療中である。数年前、胃潰瘍を病んだ。主訴は胃部膨満不快、肩背急痛、逼迫感、腰痛、心息鬱々として、いわゆる婦人更年期の訴えをことごとく備えていたものである。

患者はいままで2回ほど狭心症の発作のように肩背強痛、心絞窄の苦悶を起こしたことがある。

私は初診以来、当帰芍薬散、抑肝散、茯苓補心湯等といろいろこころみたが、結局、香砂六君子湯が最もよかつた。患者はこの方を1日1貼ぐらい飲むと気持よく立働くことが可能となつていた。

ところが去る10月27日、その孫が急性肺炎で危機に瀕し、その看護に精根を傾けたため、前症がにわかに抬頭し、心臓部苦悶、動悸、息切れ、食思まったく不振に陥つた。

本患者の病因はすなわち脾胃虚弱で、常に顔面蒼白、皮膚乾燥、貧血状態であつた。脈また沈遅で力薄く、腹は虚軟で臍傍、臍中の動悸がたかぶつてゐる。私は例によって香砂六君子湯を与えたが、こんどは効がない。頑固な不眠症を起こし、ほとんど眠れないとのことであつた。

そこで思慮過度、心脾勞傷の致すところとして、加味帰脾湯を与えると、これが非常な好結果で、不眠も食思不振も、心息鬱々も治り、顔色もまたいままでもなくよくなつた。以来患者は必ず本方を請求して今日におよんでいる。』

## 囊腫腎と子宮出血に

### 帰脾湯

127

患者は三十九才の主婦で、十五年前に産産が一度あっただけである。蒲柳の質であるがそれほど大きい病氣もなかった。五年前に囊腫腎という病名をつけられ、大学病院で手術をうけた。これであと十年ぐらいは手術の必要はないといわれていた。それ以来尿中蛋白はいつも陽性で、赤血球も認められ、両方の腎臓がひどく腫れているのが自分でもよく触れることができる。

本病は約一カ月前より始まった。月経の後引続いて出血があり、まづ何でも何回かあった。子宮筋腫があるかも知れないと産婦人科でいわれたことがある。

三日前やうとの思いで自動車で病院におもむき、婦人科の診察を受けた。その病院はある宗教関係の病院で、非常に親切で信用のあるところであった。診察が終わるやすくに入院して子宮を全部別出手術しないと生命に影響すると申し渡されたのですっかり驚いて帰宅した。その後も出血はますます加わり、動悸、呼吸困難、頭痛、心下部痞悶、食思全く衰え、肩こり、めまい等を訴え、絶対安静を守っているが、体力は衰弱する一方であった。

私は懇意な知人からぜひ往診してもらいたいと電話で頼まれたが、大体の容態をきいて、相当の重症と思われたので、いったんはお断りしたのであるが、一度診察をうけてから入院するかどうかを決めたいという強い希望なので心配しながら往診した。

診ると患者は小柄でやせ衰え、顔色は少しの血色もなく、白蠟のようで、爪の色も眼結膜も、唇も舌も全く灰白色で、心音は著明な貧血性雑音を聴取できる。脈は細く、弱くて全く触れにくいほどであり、血圧は九〇一六〇であった。腹をみて驚いたことには両肋骨弓下部に小児頭大に腫大した腎臓が視診できるのである。腎腫以外の腹全体は軟弱無力である。

私は患者の応答が比較的力量があるのと、患者はもろろん、家族全員がなんとかして手術せずに治す方法はないものかという切望に対して、とにかく一週間だけ入院を延期して漢方薬を飲んでみることにしようということをしし渡した。そして処方として何にしようか、何湯の証であらうかと思案した。まず四つの処方が浮かんだ。すなわち青帰膠文湯と黄土湯、帰脾湯と十全大補湯とであった。

青帰膠文湯は、「瀉下、腹中痛、及び吐血下血する者を治す」とあり、また「下血綿々として止まず、身体痿黄、起てば則ち眩暈、四肢力無く、少腹刺痛する者を治す」に該当しているように思える。

また黄土湯の「吐血下血、久々として止まず、心下痞え、身熱悪寒、面青く体やせ、脈弱く、舌色刷白のものを治す」にも該当しているように思えるのである。

一方十全大補湯は、「気血、陰陽、表裏、内外みな虚し、貧血、心臓衰弱、胃腸機能衰え、脈腹共に軟弱で、諸出血後の貧血を補い、十全の効あり」といわれ、この方も適当に思われる。

また帰脾湯は、「諸出血後、貧血甚しく、面色萎白、地黄黄連の劑、または他の補養の劑が心下に痞えてうけ難きて用いる」となっている。

以上を比較すると、本患者の面色萎白と、爪の先、唇までも灰白なのは、地黄劑の適するところではないようである。療治茶談に、「四君子湯を用ゆるに大事の口訣一つあり、面色の痿黄と唇の血色少き時は四君子湯正面の証なり。」と

いっているところより、私は四君子湯を基とした帰脾湯を七分調劑して与えた。

この帰脾湯七分を服用してしかもなお出血が止まなければ、すなわち入院を決意していただきたいと申し含めたのであった。

幸いにも、本方服用二日間、三日目から子宮出血はヒタリと止み、食欲が急に出てきて、日一日と元氣ついてきた。そして十五日間服用の後には外出してデパートに買物に出かけたという報告であった。いままでは階段を上がるのに動悸や息切れがして苦しかったが、今日は以前のように苦しくなかったといっている。

服薬一カ月の後来院した患者は、初めの往診のときは全く別人のごとくで、顔色もよく、元氣になり、若々しくなって現われた。このとき腹診してみると、両方の囊腫腎の腫大が縮小して、圧してみても腫大をふれる程度となつて現われた。以来ますます順調で月経も普通となり、起居常のごとくとなった。

囊腫腎は先天性に多数の囊胞が生じ、あたかも囊胞の集合体のように見えるもので、大抵両側に現われ、年とともに大きくなるものである。もちろん本方で囊腫腎が治ったわけではないのである。病院の診察をもう一度うけて、その所見を知らせるようにすすめたが、くあいがいよいのと、恐ろしいのでまた行かないでいる。本患者の出血に対して、帰脾湯はまさに適応していたと思われるのである。